

ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た子どもたちの記憶を刻みます

西城春音ちゃん「6歳」 姉と一緒に遊んで走って

母のおなかにいた時から元氣よくポンポンと蹴ってばかり。男の子だと母の江津子さんは信じ、父の靖之さんの「靖」の字と「太郎」を合わせて「せい太郎」と名付けるつもりだった。

4月、生まれたのは女の子。姉の楓音ちゃんとそろえて「はるね」と名付けた。春音ちゃんが母と共に退院すると、1歳半の姉が待っていた。母が「春ちゃんを見ててね」と頼めば、歩くことはできても、おむつはまだ外せない姉が、じっと赤ん坊を見守ってくれた。赤ん坊が泣き出せば、小さな姉が哺乳瓶を抱えてきてくれた。

父母と小さな姉と同居の祖父母のみんで育てた赤ん坊だった。共働きの両親は、3歳になった姉のため夕方の預かり保育をしている幼稚園を選んだ。当初は泣きながらの登園だった。

一方、3歳になった妹は、登園初日から

などと思って。冬になると寒いかなと思つて」と母。毎年春、母は近所の文具店で小学校の名札を買う。「三年一組」「四年一組」

満面の笑み。姉と一緒に。インフルエンザで休んだ以外に欠席したことはない。園から帰れば、姉と遊んだ。小学1年生になった姉と公園へ行った時のこと。ブランコ脇の柵に手をかけ、クルンと一回り。両足をそろえ、きれいにさかあがりを決めた。姉も母も目を丸くした。走るのも好き。1年生の姉が始めた陸上のクラブに、自分も「学校に行ったら入れっから」と楽しみにしていた。陸上が不得手な姉は「春が入ったら、やめるから」。

淡いピンクのランドセル

2011年7月。葬儀を行った。3年生の姉が手紙を読み上げた。

「春、お元氣ですか。春がいたころはいっぱい、おしゃべりをしてきたから、今はおうちの中が少し静かになって、さみしいです。天国でも、いっぱい、おしゃべりしてね。本当は一緒に学校に行くんだって

校庭で園児3人が保護者に引き取られた。戻る途中の坂でバスは渋滞に巻き込まれた。園から駆け下りてきた保護者が、園児2人を引き取った。「津波だ」という声が坂の



父は「春も学校さ連れてって」と姉に頼んでみた。濃いピンクのランドセルを使う姉に、淡いピンクの妹の使ったほしいと願った。「いやだ」と断られながらも、父は時折「連れてって」。5年生になった姉は、父が頼むより先に、淡いピンクのランドセルを背負った。「それどうしたの」と問う級友に、姉は答えた。「春ちゃんのなんだ」

そして母に宣言した。「6年生まで頑張るからね。陸上も続けることにした。6年生になって、こんなこともあった。

いところから「ピアニカなくした」と相談を受け、自分のものを譲り、姉自身は妹のピアニカを使うことに。「名前を書いたら」と言う母に「春音って書いて持ってくる」。母は驚き、「間違えられたら困るから、自分の名前も書かないとだめだよ」。

春音ちゃんの遺骨は、今も自宅の仏壇にある。お墓は購入したが、「夏は暑いか、

に園側に損害賠償請求訴訟を起こした。父は「みんな、この震災を教訓にしま

明日の風

晩秋の山道をぬけ 牡鹿半島の東、石巻市前網浜の仮設住宅に行政委員の大友直さん(73)を訪ねた。

日焼けした顔をほころばせながら、今月に入っても水揚げが続いたことを教えてくれた▼あの日まで23世帯82人が暮らした浜ではホヤ養殖が盛んだった。大半を韓国へ輸出し、浜の年商は2億円にも上った。だが震災で一変。被災を免れたのは5世帯。浜の仮住まいに13世帯が残った。大友さんたち8人は「前網漁業生産組合」をつくり、養殖を再開。種が育つまで定置網漁でしのぐ▼そして震災後初の水揚げを迎えるはずの今春。誰も買いに来ない。夏に入ると、大友さんは私に「韓国で売ってきてよ」と嘆いた。福島第一原発の汚染水を危ぶんだ韓国の輸入禁止が直撃した▼同じ頃、伊豆のイシダイも拒まれた。伊豆は輸入禁止海域ではない。風評被害だ。三陸でも定置網漁を手がける泉澤水産の泉澤宏専務(52)が語った。韓国の高級魚が国内で同様に売れるかと言え

など思っている。冬になると寒いかなど思っている。母は近所の文具店で小学校の名札を買う。「三年一組」「四年一組」……。父が記し、仏壇に供える。

あの日。春音ちゃんは、高台の日和山にある日和幼稚園にいた。地震後に近所の人々が撮影した映像がある。午後3時2分頃、園のバスに乗り込む一瞬の人影を母は見逃さない。紫色のジャンパーを羽織った1人目こそ、春音ちゃんだ。バスは、春音ちゃんたち園児12人に乗せ、標高約23メートルの園から海側の低地へ下りて行った。

12人のうち、春音ちゃんたち5人は、午後3時7分発のバスに乗り、内陸の自宅へ向かうはずだった。だが、海側に自宅がある7人と同じバスに乗せられたのだった。

防災行政無線が大音量で「大津波警報」を告げ、「沿岸、河口付近から離れてください。至急、高台へ避難してください」と呼びかけていた。

園児2人の保護者が車で迎えに来た。1人の保護者から「もう避難して誰もいないので門脇小学校へ向かったほうがいい」と言われたが、バスはさらに園児の自宅をめぐる。2軒は不在。3軒目の玄関には

門脇小へ行っているという置き手紙があり、バスも向かう。門脇小は

全校児童を校舎脇の階段から標高約50メートルの公園へ避難させ

た後だ。その階段を、幼稚園の教諭2人が下りてきた。校庭のバス

の運転手へ、園へ戻るようにと園長の指示を伝え、2人は階段を上っていった。



あの日の刻一刻の行動をすべて検証してほしい——。その一心で、両親は11年8月、園児3人の遺族と共

校庭で園児3人が保護者に引き取られた。戻る途中の坂でバスは渋滞に巻き込まれた。園から駆け下りてきた保護者が、園児2人を引き取った。「津波だ」という声が坂の上から聞こえ、保護者は園児2人の手を引き、無我夢中で坂を駆け上がった。

こうして海側に住む7人は全員、保護者らに引き取られ、無事だった。

午後3時45分頃、津波が到達。内陸に住む春音ちゃんたち5人が車中にいた。

父は園をめざしたが、冠水が阻んだ。翌朝、肩まで水につかりながらも到着。園でバスの場所を聞き、向かう。園から付き添う人はいなかった。車はまだくすぶり、あまりの熱気に手がつけられない。

2日後、家族と出直した。バスの中にゴルフクラブがある。これは違う。数メートル離れた所に園のバスを見つけた。園からは約200メートル先。春音ちゃんを捜す。園からその捜索に加わる人はいなかった。

前歯が生え替わろうとしていた春音ちゃんの特徴を、父は確認した。

守れる命を守らなかつた事実、園側は真正面から向き合ってほしい。何をすればよかったのか、何をしなければよかったのか、

あの日の刻一刻の行動をすべて検証し

てほしい——。その一心で、両親は

11年8月、園児3人の遺族と共

に園側に損害賠償請求訴訟を起こした。

父は「みんな、この震災を教訓にしまつて言うけど、何が実際あったか分からなくて、何を教訓にすんのやって思う」と語る。震災後、防潮堤の建設や高台の宅地造成が進むが、「それで尊い命を守れるとは思えない。日和幼稚園のように高台から下へおりてしまう人たちもいるんですよ」。

裁判所へ行くたび、わが子と対面した時がよみがえる。気が狂いそうになる苦しさをこらえ、父は通い続けた。13年9月の仙台地裁の判決は、両親らの訴えを認め、園側は「ラジオや防災行政無線の放送内容を正確に聴取する必要があった」と指摘した。

「お月さんになったの？」

春音ちゃんには2人の弟がいる。

あの日は2歳半だった靖汰君は、アニメ「アルプスの少女ハイジ」のハイジと子ヤギの踊りが大好き。一緒に踊って、とせがむ弟の手をとり、春音ちゃんは、弟があきるまで一緒に踊ってあげた。震災後、弟は母と園へ行くたび「春ちゃんと一緒に帰ろう」と屈託ない。しばらくして母が「春ちゃんはお空の上にいるんだよ」と教えると、「お月さんになったの？」と先をあいだ。

13年7月、赤ん坊が生まれた。母は思いめぐらせていた。春の妹なら小春かな。長寿を願って千春もいい。待ちわびた子は、男の子だったので「春汰」。「しゅんた」と名付けて「しゅん」と呼ぶ。「はる」は、春しかないから。春汰君のつぶらな瞳も草も、春音ちゃんによく似ている。

「これだけ行き来がある国内でも売れる魚は地域差がある。味覚は保守的なもの」▼盛夏。ようやく前組合の水揚げも始まった。九州への販路開拓に力を注ぐ石巻市の販売業者、ヤマナカの高田慎司社長(46)も買いに来た。「40代の若さだから頼もしい」と組合長の鈴木信男さん(63)は目を細める▼組合にも若さが脈打つ。最年少組合員の渡邊守晃さん(33)。組合仲間「もりあきは、すごいよ。力もあって魚に詳しくて『釣りキチ三平』と同じ。俺たちが支えてもらっているんだ」▼浜に育った中学生の時に父が他界。宮城県水産高校に進むと、父に代わってアワビ漁やウニ漁へ出た。ホヤの水揚げも手伝った。卒業後、地元の水産加工会社に勤めた。しかし、震災で全壊した浜の姿に「誰もいなくなるんでねえか」と不安を強めて退社。漁に加わった▼晩夏の朝。浜辺でむいたばかりのへソホヤを私に手渡してくれた。歯ごたえは厚い果肉のよう。潮の香りとともに甘みが口の中に広がった。

雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの
雄勝病院の話から始めよう。

[第3回]

2人の栄養士と笑いあふれた厨房

入院患者にはお年寄りが多かった。大半の人は腹部に通した管から栄養をとっていたが、食事ができる人も10人ほどいた。その人たちの朝昼晩の献立を練っていたのが、主任栄養士の佐々木弘江さんだった。

短大卒業後、1989年から病院に勤務。仕事の合間を縫って勉強し、管理栄養士の国家試験には初挑戦で合格した。

心臓病を患う人には塩分やカリウムを控え、のみこむ力が弱い人には牛乳ではなくヨーグルトを……。症状を改善するよう栄養量に細かく目配りする。

厨房で包丁を握るのは、栄養士ではなく、調理員だ。調理と食材調達は委託していた。

2009年夏。委託先から20歳の女性栄養士が加わった。調理員の束ね役だ。偶然にも同じ短大卒で、ちょうど20歳下。

後輩は、まず、先輩の朝の第一声に感心させられた。「おはようございます」と明るい声を

厨房に響かせる。身長145センチの小柄な体からあふれる元気な声。「うちではこうじゃないのよ」と先輩は笑った。ほどなく、後輩は、先輩を「弘江さん」と名前で呼ぶようになった。

本館1階に厨房があり、脇の事務室で栄養士2人は肩を並べて座った。机から目を上げれば小窓があり、厨房を一望できる。

「弘江さん」
厨房から調理員が呼ぶ。調理員は全員で4人。弘江さんが作った献立表を手にする。

表は献立名と材料だけを記載する。カレーなら「油 肉 野菜 水 ルー」と使う順に材料が並ぶ。年配の調理員は「こいつ何」「これ、わからない」と問いかけてくる。

「うーん、書くから」。弘江さんは明るく応じ、表の油と肉を手書きのカッコでくくる。「油は肉を炒めるのに使う」の意味だ。野菜を別のカッコにくく

り、油と肉へ矢印を引く。「そ

こに野菜を入れる」の意味。

それでも、「これ、どうしたわけ」と調理員から繰り返し聞かれることもある。そのつど弘江さんは笑顔で同じ説明を丁寧に繰り返す。後輩は感心した。

(私だったら、さっき言ったじゃんって口走っちゃうのに)
しかも、そのたびに弘江さんの仕事が滞る。後輩が質問を制しても、長年一緒に働く調理員たちは「いいんだ。弘江さんはちゃんと答えてくれっから」。

たまに、献立表に材料を書き漏らす。先に気づいた調理員が「こいつ、油へえってねえぞ。油いれねえのか」。弘江さんは笑い出す。「ごめん。いじわる言わないで入れてー」

調理員が楽しく料理をするところが大事だ。不機嫌に鍋を混ぜれば火加減も変わり、そのしわ寄せは患者に行ってしまう。

厨房は和気あいあい。休憩時間には笑いがあふれた。調理員は腰をゆすって踊り出す。

夏、窓をあけていると、隣の診察室へ笑い声が届くらしい。副院長が「聴診器の音が聞こえない」と言いに来る。「騒いでもいいから今日はニンジン入れるなっ」と言つて去る。当直の職員の仕事も厨房で作っている。

うどんのつゆは昆布とかつお節で

ニンジン

は、確かによく使っていた。栄養がありながら、値段が安いからだ。

過疎地の自治体病院の例に漏れず、雄勝病院も市の補助金なしに経費を賄えなかった。厨房にも切り詰めるように注文がつき、弘江さんは苦心した。豆腐は病院近くの店から買っていたが、野菜は安価なものを求め、近所で買うのはあきらめた。

ふだんは笑顔を絶やさない弘江さんが、「鍋、買ってくれない。もう何なの」と怒りながら厨房に現れる時もあった。

予算のことだ。
煮物などを作る深鍋を買いたくない。鍋の取っ手がなくなっており、調理員はミトンをはめて持つが、「あちーっ」と声を上げることもある。

廊下ですれちがう時も、副院長は低い声で一言「今日は松阪牛を出してくれ。あるいは今日はニンジン入れるな」。

当初、怒られたのかと後輩が驚くと、傍らの弘江さんは笑っている。副院長得意の冗談だ。



厨房の予算はなかなか増えなかったが、毎週のように鍋の予算交渉に挑む姿は、後輩には頼もしかった。(厨房のためなら闘う。私たちを守ってくれる)

「ミキサーも新しくできたらね」。調理員がそう嘆いたこともある。弘江さんは口をはさまず、聞き手に回っていた。

予算がつくまで、ミキサーも泡立て器も弘江さんが自宅から持ち込んでいたことを、後輩は最近になって知った。

調理員の得手不得手を見極めて、調理と盛りつけの手間も考えぬき、弘江さんはシンプルなお献立を作った。ニンジンの甘煮とアスパラガスの炒め物だと、煮る工程と炒める工程が要へ

女川町議会 福島を視察

「すべてがれきになる」 あの街並みが……

女川町議会は今年7月、震災後初めて福島第一原発事故の被災地を視察した。3日午前、まずは浪江町を訪問。原発があるのは南隣の大熊町と双葉町だが、浪江町一帯にも放射能汚染は広がった。

午後、約50キロ先の二本松市に移った浪江町役場で説明を聞き、質問する。

平塚勝志議員(65)は「がれきはまだ残る」と切り出した。朝一番に訪ねた請戸漁港周辺のことだ。何隻もの船が打ち上げられたまま、夏草に覆われていた。

「いつごろまでに処理できるのか。あれを見て、まだあったのか、と思ったので。女川町は昨年度、終了しました」

「入札も終わりましたので、ぼちぼち進んでいくかと思う」と浪江町議の1人が答えた後、別の町議が「今の話は『津波がれき』ですね」と念押しした。「はい」と平塚議員。浪江町議は続けた。

「今日通ってきたあの街並みの建物がありますね。あれ、いずれ、すべてがれきになるんです」

「おお……」。女川町議たちがうなづいた。「これが原子力災害の苦いところです。あの処理が未解決なんです」と浪江町議は語る。その顔を凝視して、平塚議員は「あの町が。街並みが。がれきになる……」。言葉が続かない。「確実になります」。浪江町議が静かに返した。

平塚議員は当時を「女川と福島の違いを強烈に感じた時ですね」と振り返る。浪江町をバスで巡り、車窓から中心街を見た。ほとんどの建物が震災前と変わらない立ち姿だった。「人がいないんだな」とは思った。「あれもがれきになるんだ」とまでは思い至らなかった。

翌4日。女川町議会は、会津若松市にある大熊町役場も訪ねた。そこで聞かされた話も、平塚議員には衝撃だった。

震災の翌朝の話だ。国の避難指示を町へ最初に伝えたのは、避難所の警察官が受けた無線連絡。その後、国から町へ直接入った連絡は「念のために避難を」。

避難時にこう尋ねた住民もいた。「べこに餌やりに帰らなくちゃいけない。何時に帰れるんだ」。町企画調整課の池沢洋一課長(57)が女川町議たちに説明した。「それから3年以上も帰れなくなる」とは誰も考えていなかったと思います」

「私が悪いの」職場の仲間を責めず
弘江さんは、その場で後輩の質問に答えられなければ、あとで調べて、必ず伝えた。

研修会の案内が弘江さんに届いた。「いいなあ」。後輩が漏らした一言を聞き逃さず、弘江さんは彼女に「行きたい?」。委託先の自分は無理だろうと思っただけで、「はい」と後輩。後日、弘江さんはさりりと「行けるよ」。主催者に掛け合う姿は見

せず、連れて行ってくれた。事務室で後輩が右隣の弘江さんを見る。その背後に窓があり、海が見える。先輩のおしゃべりは楽しくて止まらないが、窓の光がまぶしい。

そんな後輩を見て、弘江さんは笑いながら「逆光だね。でも、あえてカーテンは閉めないから」。日の光は、おしゃべりを止めるのに、ちょうどいい。空調のない事務室は、夏は暑く、冬は寒かった。

10年夏。窓辺に、日よけのすのこをつけてもらった。そこに赤茶色の小鳥が止まるようになった。後輩は鳥が苦手だ。ある日。弘江さんはそっと厨房を出て行った。外から事務室の窓辺に近づくと「わーっ」。突然の大声に鳥は驚いて飛び立つ。後輩もびっくり。

る。ニンジンとアスパラガスと一緒に炒めれば工程は一つ。その間に肉料理に手をかけられる。一品一品に手はぬかない。うどんのつゆは、昆布とかつお節から出汁をとった。その空き時間に、うどんをゆでる大きな回転釜を丁寧な磨きで弘江さんの姿が、後輩の記憶に残る。

「すみません。私がしゃべったから」と後輩が謝ると、「私が悪いの」と苦笑しつつ厨房を飛び出す。「しゃべりすぎたね」などと後輩を責めるようなことは一言も口にしなかった。

大急ぎで長男の大輔君を保育所へ迎えに行く。育児と家

事もこなす3児の母だ。夜にまた厨房へ戻り、土曜日にも出勤して献立表を仕上げた。

11年春。後輩の転勤が決まり、会社の上司が弘江さんへその報告に来た。先輩と後輩は並んで座った。先輩は無言のまま上司の話を聞いている。後輩は肩を落とし、隣に目を向けた。口を結んだ弘江さん。その目から涙がぼたぼた落ちていた。

